|||| 研究ノート ||||

儒教の経済学ー山田方谷を中心として

馬　田　哲　次

Ⅰ　はじめに

日本政府は，現在多大の累積赤字を抱えている。2003年９月末現在の政府債務残高は，国債等と借入金を合わせて，6,556,840億円（財務省ＨＰ；平成15年12月25日発表）にものぼっている。小泉政権の「構造改革」が行われているが，その効果はまだよく見えない。政府はあてにならないと腹をくくった民間企業の努力で景気回復に向かいつつあるという見方もあるようだ。

ところで，かつて日本には，赤字に悩む藩の財政を改革した人達がいた。上杉鷹山は，その中でも良く知られた人の１人である。

上杉鷹山は，宝暦元（1751）年，九州の日向（宮崎県）高鍋の秋月という３万石の小大名の家に生まれ，17歳のときに米沢藩主（山形県）となり藩政改革にあたった。そのときの借財は20万両にのぼっていた。約54年で借財の返済を終わり，５千両の余剰金を残した。

あまり知られていないが，山田方谷という人物がいた。彼は幕末に当時10万両の借財を抱えていた備中松前藩（現在の岡山県高梁市）の藩政改革を行い，その借財を８年で返済し，なおかつ10万両の余剰金を残した。

本稿は，山田方谷の生涯，政策等についてまとめ，上杉鷹山とも共通する儒教の思想の中の，陽明学の中心的な思想についてまとめたものである。Ⅱ節で山田方谷が生きた時代を，Ⅲ節で彼の生涯を説明し，Ⅳ節とⅤ節で彼の行った藩政改革とその思想を紹介する。Ⅵ説がまとめである。

Ⅱ　時代背景

山田方谷が活躍したのは江戸末期である。当時に江戸幕府については，方谷の次の例えがよく表していると思う。

「徳川氏の気運はおそらくながくないでしょう。その前兆はいろいろ

あります」

と語り，その前兆を指摘し，続けて評した。

「これを衣服にたとえますと，家康侯が材料を備え，秀忠侯がこれを織り，家光侯がこれを着て，以後歴代将軍は皆これを襲用してきました。吉宗侯（八代将軍）がこれを一度洗濯し，楽翁侯（松平定信）が再度洗濯をしましたが，以後は汚れとほころびはとてもはなはだしく，新調しなければならなくなってきました。」

同席していた渋川波紋が

「三度洗濯したらどうなんでしょうか」

と尋ねると，方谷は，

「布の素材は，もうとてももろくなっています。裁縫に耐えることはできないでしょう」

と答えた。　　(林田明大p.132—133)

嘉永6（1853）年にペリーが来航し，万延元（1860）年に桜田門外の変が起こった。そして，慶応3（1867）年に大政奉還と王政復古の大号令が下った。山田方谷が生きたのは，そのような激動の幕末から明治にかけてである。

Ⅲ　山田方谷の生涯

山田方谷は，文化2（1805）年備中松前藩（現在の岡山県高梁市）の阿賀郡西方村に生まれた。諱を球，字を琳卿，通称を安五郎，そして，幼名を阿隣といった。

文化6（1809）年に5歳になった安五郎は，丸川松陰の塾に入った。松陰は新見藩の藩儒であり，かつて大坂の中井竹山の懐徳堂に学んだ。

松陰の門に入った翌年に，藩主の関成煥から表彰されている。ある人に「将来どんなことがやりたいか」と聞かれて，「治国平天下」と答えている。「治国平天下」とは『大学』という書物で説かれた思想である。また，4歳のときには「天下太平」という字も書いている。

母親の梶が文政元（1818）年に亡くなっている。そして，翌年に父の五郎吉が亡くなった。そのため家に帰って家業に励んだ。19歳のころには，「安五郎さんをごまかすことは絶対にできない。ただの油商人ではない。学問が深い」という評判が高まっていた。後に大坂の銀商に藩の借財のことで交渉

をしているが，このときの経験が役だったのではないだろうか。

この評判を備中松山藩主板倉勝職がきき，文政8（1825）年に二人扶持を与えている。安五郎21歳のことであった。

このことは，「家名再興」を悲願としてきた山田一族にとっても大変名誉なことであり，長老を中心に「安五郎にもっと勉強させてはどうか」という声が上がり，安五郎は文政10（1827）年に京都留学に赴くことになった。このときは，寺島白鹿の門に学んでいる。

文政12（1829）年には，藩主板倉勝職に名字帯刀を許され，8人扶持を給され，中小姓格とされ，有終館会頭を命ぜられた。有終館とは，松山藩の藩校であり，会頭とは校務主任である。

天保2（1831）年に3度目の京都留学に赴き，この時も寺島白鹿の門に入った。このとき彼は27歳だったが，以後32歳になるまで，京都ばかりでなく東京にも留学し，春日潜庵，佐藤一斎，松崎慊堂，佐久間象山らと交流した。特に，佐藤一斎との交流により，陽明学に出会ったことは一大衝撃であった。

天保7（1836）年に松山に戻り，有終館学頭に命じられた。天保15（1844）年に世子と決まった勝静が入国した。

天保9（1838）年，家塾「牛麓舎」を開いた。

嘉永2（1849）年に藩主板倉勝職が病気のため隠居し，世子の勝静が後を継いだ。勝職はその年に亡くなった。勝静は藩主になると山田方谷に元締並びに吟味役を命じた。そして，嘉永3（1850）年から藩政改革に乗り出した。

藩主の板倉勝静は，嘉永4（1851）年に，寺社奉行に任命された。

嘉永6（1853）年にペリーが来航し，嘉永7（1854）年に徳川幕府はアメリカと日米和親条約を締結した。そして，安政5年に日米修好通商条約が調印された。

安政4（1857）年に元締役を辞めて生まれ故郷の西方村長瀬で屯田兵方式の農兵隊を育て始めた。門人の大石隼雄が元締めに就いた。

万延元（1860）年に大石隼雄が元締めを辞したため，方谷は再び元締役になったが，翌年病気のため帰国し元締役を辞めた。

幕末のゴタゴタのため，板倉勝静は老中の仕事に専念する必要があり，山田方谷が実質的に藩の政治を行うことになった。また，山田方谷は，板倉勝静のブレーンとしての役割も果たしている。元治元（1964）年勝静が長州征伐のために出兵したので留守部隊の指揮を任された。

慶応3（1867）年，大政奉還上奏文の草案を書いた。

慶応4（1868）年戊辰戦争が起こり，幕府軍の敗北で，備中松前藩は朝敵となった。藩内は徹底抗戦か恭順かで二派に分かれたが，方谷は，士民を守るには恭順しかないとして抗戦派の藩士を説得し，備中松前城を征討軍に無血開城した。その際，謝罪文の草案の中の「大逆無道」の文字を巡ってはげしいやりとりがあった。方谷はこの4文字が除かれなければ自決する覚悟でいたが，「軽挙暴動」に書き換えることで話はついた。

明治維新後，後進の教育にいそしんだ。明治6（1873）年閑谷学校が「閑谷精舎」という名で再興され，方谷はそこに年二回通い，督学にあたった。

明治10（1877）年に西南戦争が起こった。この年に山田方谷は亡くなった。

Ⅳ　山田方谷の藩政改革

この節では，山田方谷が行った財政改革の基本方針について述べる。童門冬二は，次のようにまとめている。

●藩が商人から借りている金，つまり負債の返済をどうするか
●藩主板倉勝静が，自ら倹約節約の実を示すこと
●そのことを，いきなり下に強要しないこと。藩主の姿勢によって，下のものが自覚し真似をするように仕向けること。
●産業奨励によって増収策を考えること。
●経済の本義は「経世済民，すなわち乱れた世を整え，苦しんでいる民を救うこと」にある。したがって，今回の財政再建政策は，たんなる銭勘定ではなく，この「経世済民」の目的を遂げるためであること。
●それにはなにより人材育成が大事なこと。人づくりを活発に行うこと。

などであった

（童門冬二　p.117）

これらの方針に従って，彼が行った政策は次の通りである。

まず第1に，今後借財をしないことを条件に，従来の負債は，新旧に応じて10年賦または50年賦にすることを銀主たちに申し込み認めさせた。そのう

え，借金の抵当となっていた大坂蔵屋敷の年貢米を備中松前まで持ち帰らせることを認めさせた。なおこのとき，松山藩は表向き5万石になっているが，実際は1万9,300石しかないこと及び，財政再建の計画を提示している。

次に行ったことは，藩内の豪商達の藩への貸付金を凍結し，その全商権を剥奪した。

次に行ったことは，倹約節約の率先垂範である。具体的に行ったことは，藩士の給与のベースダウン，着物は上下ともに綿織物を用い，絹の使用は禁止したこと，女性のかんざしは，ある身分以上は銀1本，それより下は真鍮にしたこと，櫛は全て木か竹にしたこと等である。実際に行う上で大切なことは，自分が率先して行うこと，押しつけられてやるものではなく，自覚して行うことである。

次に行ったことは，藩札の焼き捨てである。

備中松山藩で初めて藩札が発行されたのは，延享年間（1744～1748年）のことであった。その後，寛政年間（1789～1801年）になって再び5匁札を発行したが，この頃までにはきちんと本位貨幣が準備されていた。

その後，藩の財政が窮乏してきたので，この準備金に手をつけ始めた。そして，天保年間（1830～1844年）に大量の5匁札を発行した。つまり，準備金不足しているにもかかわらずそれ以上の5匁札を発行した。さらに悪いことには5匁札の贋札が出回り，藩札の信用はなくなっていた。

そこで，藩札の信用を回復するために，藩札の焼き捨てを行った。嘉永3（1850）年から嘉永5（1852）年までの3年の間に，藩札を正貨と交換した。驚いたことに，本物も偽物も正貨と交換した。そして，見物人の前で，朝8時から夕方5時頃までに消却するという一大パフォーマンスを行った。

山田方谷がこのことを行ったのは，単なる思いつきではなく，明末清初の代表的な陽明学者黄宗羲の『明夷待訪録』等，中国宋代，元代，明代の貨幣経済を研究してのことのようである。

次に行ったのが，殖産興業である。彼は未だ未開発の山岳地帯に目を付け，いかなる山間の地であっても米を作るという方針を貫き，鉄山の開発，銅山の開発，杉，竹，ウルシ，茶などの栽培，そして，タバコの増殖等を行った。農民に対してさらなる年貢を求めず，新田から取れる米には租税免除とした。

生産された商品は，高梁川の高瀬船を利用して，主として瀬戸内海の玉島港に積み出され，大坂や江戸へ運ばれた。

山田方谷は，殖産興業を行うために，「撫育局」という新役所を創設し，藩内で生産される一切の商品は，そこで藩が独占的に管理した。

V　思想

最後に，山田方谷の思想について述べる。経済についての考え方は，彼が江戸の佐藤一斎の下で学んだ頃，つまり天保6（1835）年前後，の小論文『理財論』に端的に表されていると思う。なお，以下の『理財論』からの引用は，林田明大（1996）による。

まず，経済の方策について，これまでになく綿密になっているが，藩の財政はますます困窮するばかりである。知恵が足りないのでもなく，方策が足りないのでもないと述べ，次のように言う。

> だいたい，天下のことを上手に処理する人というのは，事の外に立っていて，事の内に屈しないものです。ところが，今日の理財の担当者は，ことごとく財の内に屈しています。

財の内に屈するとは，金銭の増減にのみこだわり，財務の窮乏のみを心配していることをいう。人々の心が邪悪になり，綱紀が乱れても気にせず，ただ理財のテクニックのみに興味をもっている。これではいけない。事の外に立つ必要がある。では事の外に立つとはどういうことか。次に引用してみよう。

> さて，ここに一人の人物がいます。その人の生活は，赤貧洗うがごとくで，居室には蓄えなどなく，かまどにはチリが積もるありさまです。ところが，この人は，平然としているのです。貧しさに屈しないで，独自の見識を堅持しているのです。この人は，財の外に立つ者である，といえます。結局，富貴というものは，このような人物に与えられることになるのです。

また，次のようにも言う。

> そこで，今の時代の名君と賢臣とが，よくこのことを反省して，超

然と財の外に立って，財の内に屈しない。そして，金銭の出納収支に関しては，これを係の役人に委任し，ただその大綱を掌握し管理するにとどめる。そして，財の外に見識を立て，義理を明らかにして人心を正し，風俗の浮華（…略…）を除き，賄賂を禁じて役人を清廉にして，民生に務めて人や物を豊かにし，古賢の教えを尊んで文教を振興し，士気を奮い起こして武備を張るなら，綱紀は整って政令はここに明らかになり，こうして経国（…略…）の大方針はここに確立するのです。理財の道も，おのずからここに通じます。しかしながら英明達識の人物でなければ，こういうことはなしとげることはできないのです。

この考えに対して，飢えや寒さによる死がせまっているのだから，財政問題をなんとかしなければどうすることもできないという反対意見にたいしては，次のように答えている。

義と利の区別をつけることが重要なことです。綱紀を整えて，政令を明らかにすることは義です。餓死を逃れようとすることは利なのです。君子は，（…略…）ただ，〈義を明らかにして，利を計らない〉ものです。ただ，綱紀を整えて，政令を明らかにするだけなのです。餓死や死をまぬがれるかまぬがれないかは，天命なのです。（…略…）しかしながら，（…略…）〈利は義の和〉とも言います。綱紀が整い，政令が明らかになるならば，飢えや寒さによって死んでしまうものなどいないのです。

利を追うなとうのは，分かりやすいと思う。雪印を始め，いくつかの企業が利益ばかりを優先し，不正を働いた。そのような企業は生き残っていけない。

義というのは，企業の話で言えば，その企業の存在意義，言い換えれば，社会的な使命，ミッションのようなものではないだろうか。雪印の例で言えば，「安全でおいしい食品を提供する」といのが義にあたるのではないだろうか。

義の次というか，それ以上に重要なのは，「誠」である。山田方谷の思想

の根本は，「誠」である。方谷の考えによると，陽明学の真意は「誠」である。彼の考え方は，次の引用に要約される。

> 王陽明の学の中心は「誠意」であって，あなたの主張する致良知はその誠意に含まれるものなのです。致良知によって誠意の本質を明らかにし，格物によって誠意の工夫をしなければなりません。二者が並び行われて意（心）が誠になるのです。(林田，p.78)

「誠」というのは，もともとは「中庸」にあることばである。以下「中庸」からの引用である。

> 天の命ずるこれを性と謂い，性に従うをこれ道と謂い，道を修むるをこれ教えという。(宇野，p.48)

> 下位に在って上に獲られざれば，民得て治む可からず。上に獲らるるに道あり。朋友に信ぜられざれば，上に獲られず。朋友に信ぜられるるに道あり。親に順ならざれば，朋友に信ぜられず。親に順なるに道あり。諸を身に反そうとして誠ならざれば，親に順ならず。身を誠にするに道あり。善に明らかならざれば，身に誠ならず。
> 誠は天の道なり。これを誠にするは人の道なり。誠は勉めずして中り，思わずして得，従容として道に中る。聖人なり。これを誠にするは善を択んでこれを固執する者なり。(宇野p.135—137)

人間の性（人が本来天から授かった性質）として誠がある。聖人は勉強をせずとも誠を知り，実践できるが，凡人は私利私欲にまみれているので，意識的に善を選びそれに固執しなければいけない。これが人の道である。およそこのような意味であろうか。

日常的な意味では「誠心」「誠実」「誠意」等，うそ偽りのない気持ちということでいいのだろう。

次に，守屋（2000）により，「到良知」と「格物」の説明をする。

致良知とは，陽明学の基本的な考えで，心の本体である「良知」を発現することである。そして，「良知」とは孟子にある言葉で，考えなくても善を

理解する力のことをいう。

格物とは朱子の説を始め，様々な説があるようだが，王陽明はこれを「物を格(ただ)す」と読ませて，物事のありようを正すことだという。

この他にも，陽明学には，「心即理」，「知行合一」といった重要な概念があるが，割愛する。

まとめてみると，方谷の思想の中心は，心の本体である「良知」を発現し，物事を正していく「誠」にあり，それを現実の生活の中で実践していくことにあると言えよう。

Ⅵ　まとめ

本稿では，山田方谷の生涯，政策，思想を中心にみてきた。そもそも経済という悟は儒教に語源をもち，経世済民もしくは，経国済民の略である。山田方谷はそれを実践し，備中松前藩の藩政改革を行った。

最も大切なことは，為政者の心構えである。「事の外に立ちて事の内に屈しない」政治家が今の世にどれくらいいるのだろうか？

経済成長の観点から言うと，産業を興すこと，それを藩主導で行ったのだから，矢吹邦彦（1998）がいうように，ケインズ政策の先駆けといってもいいかもしれない。また，貨幣の役割を正しく認識していたと思う。新古典派経済学によれば貨幣はベールのようなもので，実物経済には何ら役割は果たしていないと主張するが，それは間違いだと思う。マルクスが言うように，資本の運動はまず貨幣から始まるのであり，貨幣が上手く循環しないと経済もうまくいかないという見方が正しいと思われる。

本文では触れなかったが，流通面の重要性もある。山田方谷が始めたものではないが，もともと高梁川に高瀬舟を運航させ，荷を運ぶということが行われていた。北部山岳地帯で製造した品々を江戸や大坂に運ぶのにこの高瀬川が利用された。経済学には需要と供給の世界のみで，生産した物がすぐ消費者の手に渡るような考え方になっているが，現実の世界では，流通が重要な役割を担っている。

このように，現実の経済についての重要な洞察を「儒教」を学ぶことによって得ていることが驚嘆すべき事である。儒教というと封建的であり，民主主義の現代には時代遅れという認識が強いが，そのような認識は改める必要があるのではないだろうか。経済本来の意味である経国済民／経世済民を実現

するためにも，もっと深く「儒教」を学ぶ必要があるように思われる。

参考文献

宇野哲人（1983），『中庸』，講談社学術文庫

童門冬二（1990），『上杉鷹山の経営学』，PHP 文庫

童門冬二（2002），『山田方谷ー河井継之助が学んだ藩政改革の師』，学陽書房

林田明大（1996），『財政の巨人』，三五館

深澤賢治（2002），『財政破綻を救う　山田方谷「理財論」』，小学館文庫

守屋　洋（2000），『陽明学　回天の思想』，日本経済新聞社

矢吹邦彦（1998），『ケインズに先駆けた日本人ー山田方谷外伝』，明徳出版社

http://www.e-yone.cu.jp/yozan/profile.htm. 2004. 1. 30取得